

子どもの発達と絵

【子どもの発達段階と絵の関係】

子どもの絵には発達段階により変化があります。

但し、今回お伝えします内容はあくまでも参考として頂き、子どもそれぞれの個性や個人差があり、必ずしも年齢に一致するわけではない事をご理解下さい。

また、子どもが描く絵には、保護者の方へのメッセージが込められている事も多いと言われています。

年齢と段階をおって記していきます。

1. 擦画期（さつがき）

この時期の絵は、1歳～2歳頃に見られる絵になります。

これは、こちらの擦画期というそのままの絵の表現で

こすりつけて描いた絵になります。

子どもの初めてのお絵かきです。



この時期は子どもが自分の手の運動や痕跡が現れる事に興味を持ちます。

これは画用紙にクレヨンや絵の具をこすり付ける様な絵になります。

よく見る光景では、こぼした牛乳や水をテーブルや床に指でこすりつけたり、その感触を楽しみ、その痕跡に興味を持ちます。

はじめは、お子さん自身の感情や考えを表そうと絵を書くのではなく、材料体験の面白さに興味を持ち、それが進み、ぐしゃぐしゃ描きをするようになってきます。

これが子どもの絵の始まり、絵の出発点です。

その為、『なすりつけ』『こすりつけ』は決して意味のないものではなく、**一つ一つの行為を通じ、確かめ実験を繰り返していると思って下さい。**

汚されたり、ぐちゃぐちゃになる事が嫌だなあ。と感じる方もいらっしゃると思いますが、お子さまの成長にとって意味のある事なので、どうか取り上げたり、「やめて！」と禁止や制限をせず、温かく見守ってあげてください。



2. 錯画期（さくがき）

おおよそ1歳半から、3歳頃に見られる絵になります。
この時期の子どもの絵は、しっかりした線を描くようになります。

今までのごちなく打ちつけられていた点やこすりつけた線とは違い意思が出てきます。

強い線や曲線、大きな丸や小さな丸も描けるようになってきます。

大人から見ると、いたずらとしか見えない『なぐり書き』

の時代は、物に作用し、その物と自分との関係を知り、目と手の運動を一致させる事になります。

この時期を経て、次に物の形が生まれてきます。



形になっていないからと禁止をしたり、早くから何か形らしい物を描かせようと無理強いしてはいけません。

この時期は、自分の意思で描いた線が元にあった景色を変えた事に満足し、「ほら、見てみて」と共感を求めています。

『何を描いたか』ではなく『私がやったんだよ』という、絵を書いたという事柄が、**自分の可能性を認め、それに対しての共感を求めているのです。**

ぐしゃぐしゃ描きやなぐり描きを十分にやって満足した子どもは絵を書く事が好きになるとも言われています。

3. 象徴期

おおよそ3歳から4歳に見られる絵になります。

子どもは、ぐしゃぐしゃ描きをしているうちに

お話をする様になり、線のかたまりや円形らしき物を

指して、「おうち」とか「お母さん」と言うようになります。

見たり聞いたりする経験の中で、思いついた事を象徴的に表し、「何を描こうかな？」と考えて描くのではなく、現実にある物から想像の中にある物、突然思いついた事を描き名前をつけたり、描いた後で象徴的な形から具体的な形を連想し意味づけします。

その為「考えてから描く」のではなく「描きながら考える」を繰り返し、絵を展開していきます。そして、偶然できた形を通して大人とのコミュニケーションをとる事が楽しくなる時期になります。

また子どもの話を聞きながら、お絵かきを見守ってあげる時間が自己肯定感を育みます。



この時期に「頭足人」という、頭から手足が出ている人物が描かれることがあります。これも世界中の子ども達に共通する表現です。

この時期の子どもは視覚的に見えている物を描画や造形において再現しているわけではありませんが、絵を描く事に意味がないということではありません。

意味のある形を描かせようとせず、偶然できた形を周りの大人と楽しみたいと思っているので、お子さまが描いた絵を通し、お子さまとのコミュニケーションをたくさん楽しんで下さい。



4. カタログ期

この時期は3歳から5歳に見られます。

この時期は子ども自身が知っている形がいろいろと描けるようになり、描かれている絵は、説明されなくてもどんなものなのかが理解できます。

この時期の絵の特徴は、描かれた物同士が全く関係がないことであり、大小や因果関係、つり合いなどがとれておらず、脈略なくえがきます。

商品のカタログが並んでいるように描かれているので、カタログ期と呼ばれています。

この時期は言葉も豊になっている時なので、物の大小の比較や正確さ、順序などを正すような事は言わず、絵を描いている時に話す子どもの話を聞き、共感や興味をもって質問などをし、子どもがたくさん描きたくなるように促していく事が大切です。

子どもの絵に保護者の方などが関心や共感を持ってあげられるかが、子どもの心身の成長にも大きく影響していきます。



5. 図式前期

この時期は5歳から6歳に見られます。

子どもが知的な面でも情緒的な面でも成長し、自分を取り巻く周囲との関係や状況を知るようになっていきます。

人はこういうもの、木はこういうものなど、一つ一つの事物などについて確かな認識を持ち、概念も形成されていきます。

描く絵には、上下左右が出来ていて、物のバランスを取れるようになります。

この時期の子ども絵の特徴としては、ベースラインが出来る事です。

地面との境界に線が引かれていて、その上に人や木、家などが並びます。

客観的ではなく、おもに自分を中心にえがいたものを適切に配置されるようになるのです。

これが、この時期の子どもの空間認識です。



6. 図式後期

この時期は7歳以上から見られます。

図式前期を過ぎ後期に入ってくると、物と物との重なりや遠近が画面に表現されてくるようになります。

この時期になって、子どもは立体的な表現が可能になります。

見えたとおりに描く事が出来る様になり、写実に興味を持ってきます。



図式後期以前に写実を強要すると、子どもの認識に追いついていない為、理解の消化不良を起こす時があります。

あくまでも個々の発達段階に応じて適切な声かけと見守りが大切です。

～まとめ～

冒頭にも記載致しましたが、ここに申し上げた発達段階はあくまでも参考程度と考えて下さい。

子どもの発達や興味はそれぞれ異なり、進み方も違います。

育児をしている中で大変なことや悩む事はたくさんあるかと思います。

でも、あまりあれもダメ！これもダメ！と制止する事は成長の妨げ、興味や冒険心を止めてしまう事にもなりかねません。

周りの同じ月齢、年齢のお子さまと比べる必要はありません。

お絵かきは、お子さまと一緒に遊ぶことを楽しんで頂く為のひとつのツールでもあります。一緒に遊びを楽しむ中からいろいろな可能性を見つけてみて下さい。

